



～「もうだめだ」が口癖のAさん～

Aさんへの訪問看護は、10年近く前、大病を患った後の療養相談と引きこもり防止の目的で始まりました。

「具合悪くてしょうがない」「もうだめだ」など、体調不良を常に訴え、自宅内ではずっとパジャマ姿のままで過ごす日々でした。

2週に1回の訪問で、体調を伺いながら「まだ大丈夫ですよ」「こうやって動くと楽ですよ」と話し、マッサージ等を行い、機能維持に努めました。その後、Aさんは肺炎などで入退院を繰り返し、在宅酸素が導入され、状況は変化しながらも、自分の身の周りのことは自分で言い、在宅療養を続けられました。

しかし、年月の経過とともに、体力の低下、呼吸状態の悪化がみられ、息切れも強くなってくると、家での入浴が困難になったため、デイサービスに、通うことになりました。「こんなんでもデイサービスに行っていないかや？」と毎回気づかうAさん。そのたびに、「この状態なら大丈夫！」と状態確認を実施しながら、Aさんの不安を軽減し、デイサービスに通えるよう、支援してきました。

そのような状態が2年ほど続いた頃、Aさんは体調を崩し、体力低下・体動困難などで入院。その後退院されましたが、食事はとれない状態になっていました。デイサービスに通うことも難しくなり、訪問看護では療養相談の他、清拭や口腔ケアなど、清潔ケアも実施するようになりました。

そして、Aさんの訪問看護を続ける中、「今後」を相談させていただきました。Aさんは「もう入院は、したくない」といい、ご家族も「この状態なら、家で看取りたい」とのご意向でした。訪問看護では、状態も悪化傾向にあったため、早めに往診医との連携に当たらせていただき、その後、Aさんは、自宅で静かに息を引き取りました。

大病で倒れる前は、元気に畑仕事をしてきたAさんにとって、長い間、体調が悪く、一向に改善されない状況に、弱音を吐きたくなったり、家族に当たったりしたくなったことと思います。

訪問看護では、そんな気持ちを受け止め、うなずくことでAさんを安心させたり、時に励ましたり、家族の間に入って相談に乗ったりして関わらせていただきました。私たちは、Aさんを家で静かに看取ることができました。長い療養生活を終えたAさんの表情は、安堵にあふれていたようにも思えます。

訪問看護では、療養相談から清潔ケア・医療との連携と、内容は様々ですが、療養者様に合わせ、またその時々に合わせてケアを実施しています。療養生活に少しでも不安がある場合には、訪問看護にご相談ください。



私達は皆様のホームナースです！
困りごとの解決をご一緒に考えます。

訪問看護のお問い合わせは 一之瀬訪問看護ステーション
電話 48-6615 まで